

スギカミキリ被害（ハチカミ）

1 はじめに

スギカミキリによる被害は、全国的に発生しており、本県でも平成2年（1990年）に下伊那郡高森町でヒノキの被害が確認されて以降、下伊那北部で被害が拡大して問題となっていました。また、平成12年（2000年）には長野市、豊野町、三水村でスギの被害が確認されました。

2 スギカミキリ

スギカミキリは、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、およびビャクシンなどの立木の樹幹を加害するカミキリです。

このカミキリは、サクラ（ソメイヨシノ）が咲く頃から5月中旬にかけて樹幹に横楕円形の脱出孔（長径約1cm、短径約0.5cm）を開けて発生します（写真-1）。



写真-1. スギカミキリ脱出孔
（富山県林試 西村氏提供）

成虫は、10～25mmの暗褐色をしたカミキリで、翅に2対の横卵形の黄褐色紋があります（写真-2）。この斑紋は個体変異が大きく、斑紋のつながったもの、斑紋を欠くものもあります。

成虫は、樹皮の割れ目などに産卵します。ふ化した幼虫は樹皮下に穿孔し、内樹皮、および辺材を食害します。

幼虫は8月になると樹幹下方に向かって穿孔し蛹室を形成して蛹となり、約1ヶ月で成虫に羽化しそのまま越冬します。

なお、このカミキリは生立木のみ産卵し、枯損木には産卵しません。



写真-2. スギカミキリ成虫
（富山県林試 西村氏提供）

3 被害木の外観症状

被害木の樹幹表面には次のような症状が現れます。

(1) ヤニの漏出 樹皮下へ幼虫が穿孔することで樹幹表面にヤニが吹き出し、ダラダラと流れます。

（被害初期の症状）

(2) 横筋 幼虫の食害が原因で樹皮に水平方向の亀裂（横筋）が発生する。（被害初期～中期）

(3) ハチカミ 食害された部位を癒合組織が被うために、樹幹表面が凸凹になったり、癒合組織が露出する。（被害中期以降 写真-3）



写真-3. スギの被害部（ハチカミ）

4 被害

(1) スギ 幼虫が樹皮下を上下方向にジクザクに食害します。被害を受けても枯れないため、何年も繰り返し加害され、材内に激しい変色・腐朽が生じます。(写真-4 左)

(2) ヒノキ 樹皮下を横方向に食害します。樹液や水分の通道組織が破壊されて立木は枯れます。(写真-4 右)

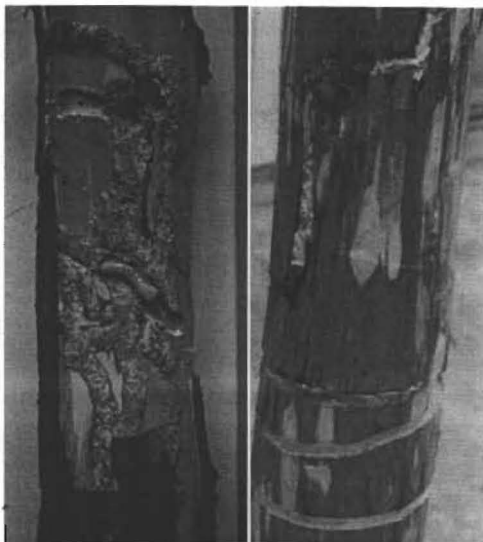


写真-4. 樹種による加害形態の違い

左: スギ, 右: ヒノキ

(スギ: 富山県林試 西村氏提供)

スギ、ヒノキともに被害部は樹幹に限られ、被害部は初期には地際から 1.5m 程度に多く、加害が続くと樹幹上部に拡大していく傾向があります。

スギカミキリが林分へ侵入した時点では特定の立木に被害が集中していますが、5年程度が経過すると被害木は林分内に分散増加するようになります。

5 長野県における被害発生状況

被害は、25 市町村で確認されています。下伊那北部、上伊那南部、長野、および北信地域で被害が多く、その他では社寺林などの小面積林分に限られます。

県南部ではヒノキに、北部ではスギに被害が発生しており、他県に比べてヒノキの被害が多いことに特徴があります。

また、被害は次のような場所に、多く発生して

います。

- 1) 果樹園、人家、耕地などに隣接した里山（標高 300～950m）の小面積林分。
- 2) 20～45 年生の林分。
- 3) 胸高直径 20 cm 前後の林分。

6 被害対策

被害対策としては、被害木処理と産卵予防があります。

被害木処理 被害木を伐倒して薬剤などで処理するもので、処理方法としては NCS などによるくん蒸、チップパーなどによる破碎、殺虫剤（スミノイン乳剤など）の散布があります。なお、被害が樹幹に限られるので、処理部位は樹幹のみとなります。

産卵予防 粘着バンド（カミキリホイホイ）による捕殺、立木樹幹への殺虫剤散布、粗皮剥ぎがあります。県内では一般的には粘着バンドによる捕殺が行われています。この方法は、成虫が樹皮の隙間などの暗いところに好んで潜む習性を利用していますから、樹皮とバンドの間に適当な隙間を作ることが重要です。

被害材の移動 被害材を処理せず移動させると、移動先で新たな被害発生の原因となるため、被害材を移動する場合は殺虫処理を行う必要があります。

7 おわりに

樹幹からヤニがダラダラでていたり、スギの幹が異様な凸凹状態になっていたら、「スギカミキリ被害？」と疑ってください。

なお、被害材（特にヒノキ）の利用途を検討するため、木材部が強度試験を実施しています。

(育林部 岡田)